

[論文]

連句を訳す

西鶴『大句数』未発表仏訳草稿における試み

畑中 千晶

How to Translate Renku: New Method Found in the Unpublished French Translation of Saikaku's *Ôyakazu*

Chiaki HATANAKA

Analyzing the unpublished French translation of Saikaku's *Ôyakazu*, translated and annotated by Jean Cholley, this paper proposes a new method of translating Renku, a poem composed of 100 linked verses. Because of the tendency to depend on contexts, and because of its complex expressions, we have to translate not only explicit words of Renku but also their implicit situations. In contrast with former English and French translations of Renku, which treat notes additionally and separately from the main text, this new French translation comments on each verse in detail with original viewpoints, just after its translation. Translation of verses and detailed comments play complementary roles. This attractive integrated style will provide us with a good example of modern Japanese translation.

1. 連句を翻訳する難しさ

本稿は、故ジャン・ショレー（Jean Cholley）氏による、西鶴の俳諧『大句数』未発表仏訳草稿の存在を世に知らせるとともに、その特徴を把握することを通じて、俳諧の翻訳方法と解釈における表現のあり方について考察するものである。

翻訳とは解釈の一つの形である。それゆえ、翻訳を読むということは解釈の軌跡をたどることと言える。とりわけ異言語への翻訳に際しては、細部まで克明に言語化していく必要があり、その過程を通じて新たな表現方法が生まれてくることもある。

浮世草子のような散文の場合と、俳句のような韻文の場合とでは、翻訳に際して直面する問題に差異があり、その克服に向けた方法論もそれぞれ異なる。だが、本稿で取り上げる連句の場合には、そのどちらも異なる側面があるように思われる。もちろん、個々の句の翻訳に当たっては、俳句の方法論がある程度まで有効だろうが、付句という連句独特の要素を解釈のなかにいかに盛り込んでいくのかについては、方法論の模索もいまだ途上と言えるのではないだろうか。

西鶴作品の仏訳については、20世紀初頭から浮世草子作品を中心に進められてきた歴史があり、その概要についてすでに報告を行っている（畑中、2007）。一方で西鶴の俳諧に関しては、いまだに翻訳書の刊行には至っていないようである。そうしたなか、このたびフランス人西鶴研究者ダニエル・ストリューブ（Daniel Struve）氏のご厚意により、氏が保管していた故ジャン・ショレー氏の翻訳草稿『大句数』の存在をご教示頂くとともに、PDFデータを介して草稿を閲覧する機会を頂いた。以下、本稿で検討を加える「未発表仏訳草稿」とは、このPDFデータに基づくものである。

この草稿は、かつてプレイヤッド叢書の西鶴選集刊行計画が進行していた頃、ショレー氏が作成したものである。この計画は頓挫し、他社から一部の翻訳作品が刊行されたものの、この『大句数』のように今日に至るま

で草稿のままというものもある。本稿では、この草稿の概略とそこでなされた試みの一端を紹介する。そのうえでさらに詳細な報告の必要性が生じた場合には、稿を改めて取り組むこととしたい。

2. 連句翻訳（英訳・仏訳）の先例

『大句数』草稿の独自性を確かめるために、まず、連句翻訳の先例を二種参照しておきたい。一つはアメリカの比較文学者アール・マイナー（Earl Miner）の *Japanese Linked Poetry* という研究書に収録された連句の翻訳で、『猿蓑』「市中は」の巻を参照してみる。また、フランスでは、ルネ・シフェール（René Sieffert）による芭蕉の連句の翻訳が刊行されている。このなかから『炭俵』「むめがゝに」を参照してみる。

2.1 マイナー訳の場合

体裁としては、左頁に注、右頁に本文という形式を取る。本文では、日本語の音節をローマ字表記したものと、その翻訳とが並列して提示されている。その際、長句は三行、短句は二行である。また、前句と付句とを一続きで表記する方式を採っており、挙句以外はすべての句が二回ずつ表記される。よって発句のみは三行だが、その後は挙句に至るまですべて五行である。これは、前句と付句で一つの世界を構成するという連句独特の発想を明示的に表現するための工夫と言えるが、それに伴う冗長さは避けられないだろう。以下、具体例として、「市中は」の巻の発句、脇、第三を引用してみる（なお、読解の便宜のため、元の句をそれぞれ墨付括弧【 】に入れて三句とも引用したのち、英訳を引用する。翻訳の底本は不明であるので『芭蕉七部集』〔新日本古典文学大系〕を代わりに用いたが、一部表記を改めている。さらに、英訳を稿者が日本語に訳し戻したものを丸括弧（ ）に入れて英訳に添える。スラッシュ「/」は改行を示す）。

【市中は物のにほひや夏の月 凡兆】

【あつしあつしと門かどの声 芭蕉】

【二番草取りも果さず穂に出て 去来】

1 Ichinaka wa / mono no nioi ya / natsu no tsuki / *Bonchō*

Throughout the town / above the welter of smelly things / the summer
moon

(街じゅうくまなく／臭うものが入り乱れている上に／夏の月 凡兆)

Ichinaka wa / mono no nioi ya / natsu no tsuki

2 atsushi atsushi to / kado kado no koe / *Bashō*

Throughout the town / above the welter of smelly things / the summer
moon / how hot it is, how hot it is / says a voice at every house-gate

(街じゅうくまなく／臭うものが入り乱れている上に／夏の月 凡兆)

なんて暑いんだ、なんて暑いんだ／家々の戸口で人声がする 芭蕉)

Atsushi atsushi to / kado kado no koe

3 nibangusa / tori mo hatasazu / ho ni idete / *Kyōrai*

How hot it is, how hot it is / says a voice at every house-gate
although the weeds / have not been worked a second time / the rice
comes into ear

(なんて暑いんだ、なんて暑いんだ／家々の戸口で人声がする 芭蕉)

雑草は／二度目には取られてはいなかったけれども／米は穂を出している 去
来)

これらの句にはそれぞれ詳しい注が付されており、これが読解の助けと
なっている。試みに第三の注を引用してみよう。

3 Design-Ground. Heavy. Suumer. Grasses. Cultivation. Peasants.

The stanza ends as the third is supposed to, in “-te,” but since the third
usually lowers in impressiveness after the first two, the rise in this stanza
above 2 is quite novel. The diction has a fine literary quality. The heat of
2 is considered as the nurture for an early crop.

(3 文－地。重。夏。草。耕作。小作農。

この句の末尾は第三として「て」で終わることが想定されているが、しかし、
通常、発句と脇のあとでは第三は印象の強さを弱めるものであるから、脇よ
りもこの句が強いのは全く斬新である。この口調は卓越した文学的価値を持

つ。脇の熱気は早採れの作物の育ち方と見なされている)

独自の指標に基づいて句の特徴を端的に示すとともに、その趣向を解説したものとなっている。「文－地」というのは、小西甚一の論考に基づいてマイナーが俳諧の評価軸として設定したものである¹⁾。最も強い印象を与える句が「文」で、印象の弱い句が「地」とされ、「文」「文－地」「地－文」「地」の4段階があるとする(この順で弱まる)。この解説で「文－地」とあるのは、「文」に次いで強い印象を与える句という評価である。読者は本書の研究編において、これらの用語の使い分けを理解しておく必要がある。マイナーは同書で「連なり sequenceこそ、俳句から俳諧を識別するとともに、俳諧と連歌とを結びつけるもの」(111頁)と述べている。「連なり sequence」のなかでどのような変化が意図されているのか、システムティックに把握することを試みたものと言える。

2.2 シフエール訳の場合

次にシフエールによる「むめがゝに」の翻訳を見てみる。まず体裁だが、英訳同様、長句が三行、短句が二行で表記されている。この表記方法は、現代の英語連句にも見られ、広く共有されているようである。一方でシフエール訳においては、マイナー訳とは異なり、日本語の音節は表記されていない。また、マイナー訳のように、前句と付句とを一続きで表示することもせず、各句が一度だけ記載されている。マイナー訳は、研究書の一部を構成していたため、読みやすさよりも資料としての明瞭さが優先されたものと思われる。これに対し、シフエール訳は、フランス語で読む読者に向けて、完結した読み物を提供することに重きを置いているように思われる。左頁に注、右頁に本文という形式は、マイナー訳と共通している。なお、長句には左寄せ、短句には中央寄せのインデントが加わっていて、結果として本文頁の全体に散らし書きを施したかのような印象が生じている。和紙のような質感を持つ表紙には、朱墨で鮮やかに「俳」の字が記されていて、散らし書きといい、表紙といい、全体に洒脱な雰囲気が漂う。以下、『炭俵』『むめがゝに』の巻の発句、脇、第三を引用してみる(引用、および、表記の法則は先の英訳と同様)。

【むめがゝにのつと日の出る山路かな 芭蕉】

Parfum de prunier / le soleil soudain se lève / sentier de montagne

Bashô

(梅の香り／太陽が突然昇る／山の小道 芭蕉)

【処どころに雉子の啼たつ 野坡】

Par ici par là s'élève / le cri du faisan

Yaba

(そこここに起こる／雉の鳴き声 野坡)

【家普請を春のてすきにとり付て 全】

Pour bâtir la maison / on aura mis à profit / le repos du printemps

Yaba

(家を建てるために／役立てたことだろう／春の休みを 野坡)

先に引用したマイナー訳に比べ、語彙の数も少なく、非常に簡潔である。音律も厳密に五七五、あるいは七七となっているわけではないが、それに近づけるように意識されているようである。このように翻訳が簡潔であると、注で相当に補足する必要があるように思われる。次に、やや長文にわたるが、発句の注を引用してみる。

1. Une fois encore, Bashô prend d'emblée le contre-pied des lieux communs et des clichés de la poésie classique : alors que le parfum des fleurs de prunier était, de tous temps, associé à l'image d'un jardin clos dans les ténèbres de la nuit des premiers jours de l'année ou du clair de lune voilée par les brumes du printemps, le poète imagine un voyageur, ou même un simple promeneur, qui s'est engagé au point du jour dans un sentier de montagne; or voici qu'au détour du chemin, une bouffée de parfum, provenant sans doute d'un bosquet de pruniers sauvages, le surprend soudain, cependant que jaillit de l'angle de quelque rocher un rayon du soleil levant dans toute la splendeur du petit matin. À noter que Kikaku juge tout à fait déplorable ce "soudain" qui lui semble pécher par excès de "légèreté", *karumi*.

(1. 再び芭蕉は、いきなり古典詩歌の常套句や紋切り型の正反対を選ぶ。古典詩歌では、梅の花の香はいつの時代でも、新年の夜の闇に沈む、囲いの中の庭のイメージか、あるいは、春霞に覆われた月影のイメージに結びつけられるところであるが、芭蕉は旅人か、あるいは単なる散策者を想像している。この人物は、夜明けに山の小道を歩み始めたのである。さて、まもなく道の曲がり角のところで、おそらくは野山の梅の木立から漂ってくる芳香が、不意にこの人物を驚かす。と同時に、紛れもないこの夜明けに朝日が岩角からほとばしり出る。この「不意に」という語について、「軽み」が過ぎるのが難点に思われて全くもって残念だと其角が断じていることに留意が必要である) 非常に詳しい注である。「梅」がもたらす伝統的な連想(文化的コード)を押さえたうえで、芭蕉がどのように新機軸を打ち出したのかを詳述している。訳で十分に表現できなかった情景描写も詳しく書き込み、梅の香が不意に旅人を驚かし、それとともに朝日が差し込むということを、臨場感をもって語っている。また、其角による批評にも言及している。よって読者は、句の鑑賞のみならず、それを文学史のなかに位置付けつつ読解を進めることができる。

以上に見てきた英訳・仏訳は、いずれも芭蕉の連句の翻訳という点では共通しているが、一方は研究書の資料編における翻訳であり、他方は一般読者をも想定した翻訳書であることから、同列で評価することは難しい。ただ、いずれの翻訳においても、訳文自体では到底表現しつくせないものについて、それを補うための注を施すことに、かなり力を入れていることがわかる。連句は元来、座の文芸であることから、複数の人々に共有された文脈を有している。しかも、その文脈は付句によって絶えず読み替えられ、ずらされていく。そのように高度に文脈に依存した言語表現である以上、単語そのものの意味を訳すだけでは、翻訳としてはいかにも不十分であろう。では、それを補う注としては、どのような体裁が望ましいのだろうか。控えめに小さな字でぎっしりと注を付すことが、果たして効果的なのかは疑問の残るところである。シフェール訳がこれに当たる。注と本文とを厳密に左右頁で対照させるために、圧倒的に文字量の多い注の頁は必

然的に細かい文字で埋まる。必ずしも読みやすいというものではない。

実は、本稿で紹介する仏訳草稿には、ここで参照した二つの翻訳のいずれとも異なる点として、解釈の叙述に多く筆を費やしている点が指摘できる。シフェール訳のように、必要に応じて適宜注を参照せよというような控えめな体裁ではなく、解釈と本文とを織り交ぜつつ、全体が一連の読み物となるようにして執筆されているのである。以下その詳細を確かめていきたい。

3. 読み物としての翻訳——『大句数』草稿の試み

この草稿は、本文がA4用紙49枚で、作品改題も18枚に及ぶ。改題は、『古今集』の俳諧歌以降の俳諧の歴史を詳述したのち、音律の仕組みにも言及するなど概説的な内容である。また、連句の翻訳として見た場合、解説と訳文とが交互に提示され、全体を一つの読み物として通読できるように配慮されている点が、従来にはない特徴と言える。先に参照したマイナーやシフェールの翻訳も詳しい注を伴っているが、それらの先行例とは異なる独自の工夫である。また、西鶴の俳諧の特質を知るうえでも、解釈の随所で興味深い問題を提示して参考になる。

翻訳の底本は日本古典文学全集『井原西鶴集』に収められた「西鶴 俳諧大句数」(序・第八)である。西鶴自序の訳はなく、必要に応じて解説で言及するに留めている。「賦何紙俳諧」を「*En manière de divertissement, haikai composés sur le papier* (楽しみとして、紙について創られたハイカイ)」と訳した後、「*fushimono* (賦物)」とは文字通りには「*distribution de noms* (名の配置)」であるとして、この一種の言葉遊びが『万葉集』にまでさかのぼることを示す(下線は原文通り)。「名の配置」とは巧みな訳である。賦物とは、句のなかに「物」の名を「賦(くば)」り詠み込むことであるから、まさに「名」の「配置」であると言える。語義を厳密に訳出しようとする姿勢がうかがえる。また、解説の叙述からは、底本における解釈にとどまらず、さらに踏み込んで独自に解釈を施していることがわかる。試みに、発句を引用したのち、やや長文にわたるが、その解説を引用してみる(表

記の法則は先の英訳と同様。下線はローマ字表記であることを示したもので原文通り)。

【花にきてや科^{とが}をばいちやが折りまする】

1 – hana ni kite ya / toga woba icha ga / orimasuru.

venues voir les fleurs / endossant la faute la garde / détache une
branche

(花を見に来て／落ち度を引き受けて子守が／枝を折る)

「Venues (来て)」は、過去分詞「venu」に女性形複数を示す「es」が付されており、女の子と子守の女性とが共に花見に来た情景をうかがわせるものとなっている。訳文中に女の子の姿は描かれていないが、以下の解説を合わせ読むことで情報を補うことができる。

Scène de printemps (mot de saison: “fleurs [de cerisier]”). Une fillette veut à tout prix rapporter une branche fleurie en souvenir de la visite aux cerisiers en plein épanouissement; la jeune fille qui a la charge de la garder dans ses déplacements se dévoue pour lui en casser une, endossant ainsi pour sa protégée la responsabilité d’un geste que ses maîtres lui reprocheront quand elles reviendront chez elles. Attitude gracieuse, en accord avec l’élégance des fleurs de cerisier, de la jeune fille qui tend les bras pour choisir une branche bien garnie.

(春の情景 (季語：花 [桜の]))。一人の幼い女の子が満開の桜を見に来た思い出に是が非でも花の咲いた一枝を持って帰りたがっている。外出中の子守を任された女の子が、かいがいしくその子に桜の一枝を折ってあげる。彼女らが家に帰った際主人らが咎めることになる振る舞いの責任を、このようにして可愛い子のために引き受けているのである。花の多く咲いた枝を選ぼうと腕を差し伸べる、桜の花の優雅さと調和した、女の子の優美な振る舞い))

底本には「花見に来て、乳母が、花をほしがるお嬢さんに代わって一枝折った。花盗人の科 (とが) を負ったとの意」との解説がある。これに比べ、ショレー訳には、非常に詳細な解説が施されていることがわかる。「科」の内実について、帰宅後に主人らに叱られるという形で具体的に示

したほか、この子守の少女のかいがいしい振る舞いを、桜の花の優美さと対比させ、優雅なものとして提示している。

連句としての続き方と転じ方が、翻訳においてどのように意識されているのかを見るために、さらに脇と第三を参照してみる。

【のびあがりたる山の春風】

2 – nobiagitaru / yama no harukaze

dressés bien haut sur leur pied / monts dans le vent du printemps

(足元〔＝ふもと〕からとても高く伸びて／春風のなかの山々)

「pied」には、「足（足首から下）」の意味と「ふもと」の意味の両方がある。ここで「のびあがりたる」のが、花を一枝折ろうとする乳母の姿であると同時に春の山々の姿であることから、両義を生かした訳語と言えよう。もっとも厳密には「dressés」は男性名詞の複数形を形容する「s」を伴っており、「monts（山々）」を形容していることは明瞭である。よって、「dressés」が乳母の姿を形容したものと見なすことは、訳文のみでは難しいだろう。そこで解説で、「つま先立ちで小枝に手を延ばす若い娘の姿が、雲に触れんとするように高く聳える山々の姿を引き出している。その雲とは、桜の枝を優しくうねらせる風のなかであちらこちらへと運ばれていく雲である」と補っている。第三も見てみよう。

【龍の息雲に霞に^{あらは}顕れて】

3 – ryū no iki / kumo ni kasumi ni / arawarete

du dragon le souffle / aux nuages dans la brume / se fait apparent

(竜からの息が／霞のなかの雲へと／見えてくる)

この句の解説は注目に値する部分であるので、全文を引用してみる。

Au printemps encore (mot de saison: “brume”). La posture tendue vers les hauteurs de la jeune fille et des montagnes évoque le dragon des légendes chinoises qui s’élance vers le ciel et de son souffle produit des nuages, ou du moins la brume vaporeuse de printemps qui dans le lointain voile le paysage comme si elle était composée de fleurs de cerisier.

(まだ春で〔季語は「霞」〕、若い娘の、そして山々の、高みへと伸びた姿勢が

中国の伝説の龍を想起させる。その龍は、空へと飛び出し、息で雲を生むか、少なくとも春のもやを含んだ霞を生む。この霞はあたかも桜の花でできているかのように遠くまで景色を覆っている)

第三の解釈を付けるにあたり、打越句の娘の姿までも取り込んでいるのである。これはやや踏み込みすぎた解釈にも見える。底本では「春（霞）。前句の「のびあがりたる」を昇天する龍の姿勢に見立てての付。「雲に霞」は春の山へのあしらい」との解釈が付されており、前句への付け方に言及するに留め、打越句への言及はない。連句は打越句から離れるのが基本であるから、解釈においても打越句に言及する必要はないとの判断が働いているのかもしれない。では、元の句において、打越句との接点は皆無なのだろうか。そうした眼で再度検討を加えてみると、「雲に霞」という表現に山霞と見紛う桜の情景を読み込むという仏訳の解釈は、あながち見当外れとも言えないように思われてくるのである。つまり、西鶴の発句から第三への展開は、打越句である発句の余韻を完全にぬぐい去ることなく、ゆるやかに転じていったものとして存在しているということである。仏訳はその点を見逃すことなく、解釈で掘り下げて考察を加えたもののようと思われる。

仏訳の文章を追いかけていくと、「訳す」ことから「解釈」し、「鑑賞」することへ、そしてそれを巧みに「表現」することへの一連の動きが、魅力ある軌跡を描いているさまを見て取ることができる。次は、第26句から第28句への移りを見ていきたい。

【^{くびひき}首引をする^{ぬのびき}布引の滝】

26 – kubihiki wo suru / nunobiki no taki

et se tirant par le cou / cascade à Nunobiki

(そして、首で引き合うと／ヌノビキの滝)

この第26句には、ほぼ1ページにわたる解説が付されている。他の句には平均して6行程度の解説が付されているが、その4倍にも及ぶ分量で、訳者が特に力を入れて注釈を施した部分であると思われる。まず、第24句から第26句への展開が、第12句から第13句への展開と発想が類似していると指摘している（恋句と兵法の取り合わせ）。この指摘は底本には見られな

い。第24句から第26句への展開とは次のようなものである。

24 【岩にいる^や箭もと^{ひやうはふ}り手兵法】

25 【どつこへな天の羽衣袖まくり】

26 【首引をする布引の滝】

男とその恋人が「首引」にふけるさまに解説を加えつつ、相互に引き合う勢いが、第24句の「岩に射る矢」に通ずると指摘している。つまり、この男女の出会いは、岩（＝二人を仲を隔つ存在）が負けたものと見るのである。これは、打越句を取り込んだ解釈であるが、西鶴が指合見に気づかれることなく行ったのではないかとの解釈を加えている。また、「布引」の「布」が「天の羽衣」の「衣」を思い起こさせるとともに、言葉遊びによって導き出された「布引の滝」の語が、第27句の水のイメージを喚び起こしているとする。このほか『浮世栄花一代男』巻一の三の「首引」の場面や、句集『虎溪の橋』の「首引」の句を引用して、第26句の解説を終えている。次に第27句を見てみる。

【えいさらさ水にせかれて^{のぼ}り舟】

27 – ei sarasa / mizu ni sekarete / noboribune

oh hisse et oh hisse / repoussé par le courant / bateau qui remonte

(オーイス、オーイス／流れに押しもどされて／遡っている船)

この第27句の解説はごく簡単なもので、親などの反対にあっても二人の関係を保ち続けようとする恋人たちの様子と、川の流れに逆らって船頭に引かれる船との対比を示すに留める。

次の第28句を見てみる。

【相場がつよいかしら波の声】

28 – sōba ga tsuyoi ka / shiranami no koe

les cours seraient-ils à la hausse / au bruit des vagues écumantes

(相場は高かったであろうか／泡立つ波の音に)

フランス語の「les cours」は「流れ」の意と「相場」の意の両方を持つため、この訳語にしたのは巧みな選択と言えるだろう。また、この第28句の解説は、翻訳の文章と相互に響き合いつつ、鑑賞として、また、その

表現として魅力的であるので以下に引用してみる。

Suite de l'évocation de l'eau. Comme les vagues crêtées d'écume se dressant sur la mer par grand vent s'élèvent les cris des marchands saluant la hausse des cours, après les difficultés passagères des tendances défavorables de certains jours.

(水のイメージ喚起の続き。泡に縁取られた波が、大風によって海の上に盛り上がるかのように、ここ数日の好ましくない傾向に一時苦労したのち、相場の値上がりを歓迎する商人らの叫び声上がる)

「しら波」を訳文では「vagues écumantes (泡立つ波)」とし、さらに解説では「les vagues crêtées d'écume (泡に縁取られた波)」としている。なぜ波が白くなるかといえば、それまで海が荒れていたからであり、波が高くうねるのも、風が強いためである。こうした海の情景を丹念に描き込むとともに、数日にわたって荒れていた相場の情景も想起させる解説が巧みである。底本の解説には「雑。相場が強いと見えて、値上がりを告げる景気の良い声が聞こえるとの意。邪魔がはいってもものぼるという前句を、強気の相場と見立てての付」とある。また、「しら波」には、「相場の値上がりを告げる景気の良い声のたとえ」との注が付いているが、仏訳のように海の情景を想起させる解説はない。「白波」から海の情景を連想することは、国文学に慣れた読者であれば容易なことで、読者が自由に読み込むための余白を多く残した解説と言える。これに対し、仏訳は、日本文学におけるイメージの連鎖に必ずしも慣れていないフランス語の読者に向けて、丹念にその空白を補いつつ、解説したものと言える。その解説のなかに「crêtées d'écume (泡に縁取られた)」といった美しい表現が盛り込まれており、鑑賞を味わい深いものにしている。

4. 何をどこまで読むか

連句を訳すにはどのような方法があるのか。アール・マイナーのように付句の特徴をシステムティックに分類・整理して示すというものもある

ば、ルネ・シフェールのように国文学の研究成果を伝達することに注力するものもある。その一方で、今回、未発表草稿として紹介するに至ったジャン・ショレー訳のように、訳文と解説とが一体となって、解釈を施すことがすなわち鑑賞となり、それが読み物としても楽しめる、魅力的な表現を紡ぎ出している場合もある。時に打越句までを視野に収め、大胆に西鶴の連句を読み込んでいった本草稿の試みは、連句を訳す際の方法論として極めて独自性が強いものと言えるのではないだろうか。連句の読解に不慣れた読者に向け、その沃野の魅力を伝えるという点において、ショレー訳は優れた面を持っている。今後、西鶴の連句を、例えば現代の若い読者が楽しめるように解説を施す場合などに、この試みが生かしていけるものと考ええる。

〔付記〕 本研究は敬愛大学平成 27 年度研究プロジェクト補助金の助成を受けている。

(注)

- (1) マイナー (1980) によると、小西甚一の『宗祇』(筑摩書房、1971) の解説を参照しつつ、それを「ちょっと俳諧に応用」したものだ言う (p. 72)。小西によると、「印象の鮮やかな表現」が「文」で、「印象の希薄な句」が「地」とされる。また、時として「地」の句であっても、「文」の句が続くなかに登場することで鮮やかな印象を与えることもあるといい、「地」でありながら「文」のような作用をもたらす句があるという。マイナーは、このあたりの解説を参照して、二項対立ではなく途中に 2 段階を設け、4 段階にしたものであろう。

(参考文献)

仏訳草稿 “LE GRAND CONCOURS DE VERSETS Vol. VIII” (タイプ打ち原稿、p. 1-49「井原西鶴作 大句数 第八」と縦書きで墨書)、“LE GRAND CONCOURS DE VERSETS / NOTICE” (タイプ打ち原稿、p. 1-18「SAIKAKU: Cholley 11.6.92」と署名あり)。

BASHÔ. *Le Sac à Charbon*, présenté et traduit du japonais par René SIEFFERT. Paris: Publication Orientales de France, 1993.

Miner, Earl. *Japanese Linked Poetry: an account with translations of renga and haikai sequences*. Princeton: Princeton University Press, 1980 (First published in 1979).

暉峻康隆／東明雅 (1990)『井原西鶴集』一、日本古典文学全集 38、小学館 (初版 1971)。

畑中千晶 (2007)「フランスにおける西鶴研究——半世紀の歩みと今後」『西鶴と浮世草子研究』第 2 号、笠間書院。